



サーバス九州

日本サーバス 九州支部会報 No.135 2009年11月30日

支部長 中崎忍

1. 九州支部例会の報告

1) サーバス九州支部例会報告

本年度の夏の例会を大分豊後大野市三重町のキャンプ場で開催しました。前日から北部九州は豪雨で開催が危ぶまれましたが、当日、現地は大雨でもなく実施できました。大分の会員の方々のお世話のお陰で楽しい交流の例会となりました。例会の概略は以下のとおりでした。

- (1) 開催期日: 2009年7月25日(土)、26日(日)
- (2) 場所: 大分県豊後大野市三重町中津留300
名称: 稲積白山川キャンプ村(稲積水中鍾乳洞)
- (3) 参加者: 18名(宿泊者: 15名) 福岡2名、大分11名、宮崎6名。
- (4) 当日三重町駅前のスーパーに集合し、山間の細い道路をドライブし、キャンプ場到着。
- (5) 部屋割りの後鍾乳洞施設の会議室で例会を開催。自己紹介、サーバス受け入れ、サーバス旅行の体験談などの後、鍾乳洞見学。
- (6) バーベキューで会議の続きと交流を行いました。4月の支部会議で第2回の例会は大宰府で行う計画となっておりその具体的な日にちの選定をしました。この例会に元会員夫妻も参加され、来年からサーバス会員へ復帰されることとなりました。夜は雨音を聞きながら各部屋で懇談し楽しい一夜となりました。翌朝、天候は良くなり遅めの朝食後解散しました。



2. 会員情報

- 1) 九州支部会員数 会員数 56名(2009年11月現在、先の会報での報告より1名増)

内訳: 福岡10、佐賀2、長崎6、大分16、熊本5、宮崎14、鹿児島2、沖縄1

- 2) 新会員紹介

7月1日以降1名の入会がありました。氏名: S. S(佐賀市)。

3. トラベラー受け入れ報告

- S.K(福岡県)

期間: 2009年8月17日(月)~19日(水) P.H(オーストラリア、女性)

3月に長年勤めた研究調査員としての仕事を退職し、5月にご主人とインドから始まった旅。ヨーロッパを回ってご主人は母国のベルギーに残り、本人1人でオーストラリアに戻る途中、阿蘇でALTをしている姪子さんにお会いする目的で日本に寄られました。



5月の旅が始まる前にとっても丁寧なメッセージを受け取りました。実際お会いしてとてもパワフルな方で元気を頂きました。サーバスでの旅を20年以上も続けてこられているようで、旅慣れているし、違う文化を受け入れる寛大な心の持ち主でした。私の母と1つ違いでしたので、「オーストラリアの母」という感じで色々教えていただきました。話題は、趣味、仕事、家族、生活から環境の話まで。環境の話はオーストラリアの干ばつの深刻さと、近隣国からの難民問題などオーストラリア自身が抱えている問題も新聞からではない、身近な問題として肌で感じる事が出来ました。それに「タスマニアの森が消えているのは日本で紙を作るためになくなっている。」ということも、話されていました。

滞在中2日とも夕方は私のレッスンにゲストとして参加していただき、オーストラリアの事を説明してもらったり、仲良くなるゲームをしたり、最後は日本のスイカ割りをしたり、日本の夏の子どもたちの遊びも体験してもらいました。大学で教壇をとった経験もある彼女もとても楽しんでくださったようです。

2日目の夜は、友人とその姪子さん数人をお呼びして持ち寄りパーティをし、おいしいものを囲みながら交流を楽しみました。

また、「滞在中日本円の現金がたりなくなったので、引き出しに行きたい。」とのことで、

VISAカード1枚持って町中の地銀に行きましたが、裏面の磁気が合わないらしく、次に「ゆうちょ」のATMに行きましたら、英語での指示がちゃんとあり、お金を引き出す事が出来ました。

もし、皆さんも旅行者の方が現金を入用なときは、迷わず「ゆうちょ」のATMへ行くようお伝え下さい。

暑い時期ではありましたが、今回の交流もオーストラリアを身近に感じる事が出来、有意義な時間を過ごさせていただきました。いつかトラベラーとしてオーストラリアも訪れてみたいです。



○ N. S(宮崎市)

期間：2009年8月19日(水)～21日(金) P. H and X. H(オーストラリア在住)

今回オーストラリアからは、私と同じ年令の女性がこられるとのことで楽しみにしていました。お会いしたらとてもお元気で重～いスーツケースを軽々と2階へ持ち上げる程のスタミナ十分、アウトドア派でそれでいてインテリな方でした。1日目は家の近くを散歩したいとのことでしたので、マウンテンバイクを貸しました。ずいぶん遠くまでサイクリングを楽しまれたようでした。私ならば怖くてそう遠くまでは行けません。次の日は熊本の阿蘇に住んでおられる姪御さんが来られ1泊されました。阿蘇から宮崎まで来るまで来られたのにはビックリしました。

久しぶりに私たちの娘も帰って来ていましたので、夫も加え総勢5名のにぎやかさになりました。青島の海水浴へ行きました。私が荷物の番をすることにして、お盆以降にはくらげが出ることで心配しましたが特別に問題なく、他の4名は泳ぎを楽しみました。本当に皆楽しそうで私も泳ぎたいくらいでした。2泊された後のお昼過ぎには、高千穂町経由で阿蘇へ向け出発したいとのことでしたので、昼食におそばを作りました。フィリップさんはお箸を上手に使って美味しそうに食べてくれました。

オーストラリアの自宅のベランダや利口な犬の話をしていただき、その光景が眼に浮かび、私もいつの日にか訪れてみたいと思いました。本当に楽しい3日間でした。



4. サーバス旅行報告

○フランスへのサーバス旅行

佐世保市 H. F

9月16日から20日まで南フランスのモンペリエで蜜蜂の国際会議があり出席しました。ところが航空券予

約をすると連休のため帰りの席が28日まで無く、仕方なく29日の便になってしまい、サーバスにお世話になることになりました。1か所で2泊、4か所のサーバスのお世話になりました。手短かに報告したいと思います。

21日、22日;マルセイユ、N. P 宅

指示された地下鉄の改札口に P 氏が待っていました。自宅は目抜き通りに面した4階でした。着いたのは夕方でしたが、美術史の教師である N 氏はまだ帰宅していませんでした。

P 氏が「今夕は美術家仲間のアトリエで月1回の集会のある日なので出かけるが、一緒に来るか」といいます。どんな集会なのか見当がつかないまま付いて行きました。「すぐそこだ」と言いながら15分ほど歩きました。細い通りの1階にアトリエと呼ばれる1室があり、20人ばかりの男女が外の道路に立ってワインを飲みながら談笑していました。アトリエの中には石のブロックを重ねたような抽象的な作品が1つありました。奥が作者の自宅で、彼が月に1回作品を発表し、それを鑑賞するために仲間が集まる、すなわち飲み会を行う、という仕掛けであることがわかりました。つまみなしに、紙コップでワインを飲み、おしゃべりをして、さみだれ式に散会。P 氏は写真家でこのグループの1員なのです。



家に帰ると N 氏が夕食を作っていました。これがフランスの家庭料理をいただく最初の食事になりました。食事が終わると N 氏は翌日行うテストの問題を作らなければならないからと言って自分の部屋に閉じこもりました。

P 氏は写真家で、2冊の写真集を出版していました。地中海で漁をするあらゆる種類の漁師たちの生活を記録したものと、カマログの塩田で働く労働者たちの生活を1年間追ったものでした。カマログというのはマルセイユの西に広がる海水の沼地のことで、大潮のとき入れた海水を堰き止め、蒸発させて塩を作る工場があるのです。この沼地の真ん中を国鉄は走っていて、フラミンゴがいるのを見ました。日本でも、「カマログの塩」というブランド名で売り出されています。

翌22日は2人とも仕事に出かけ、私はマルセイユの街を、地図を持って、P氏に教わったコースをたどりながら街を歩きました。美しい街で、あちこちの街角で腰を下ろし、風景や街ゆく人々を眺めて1日を過ごしました。

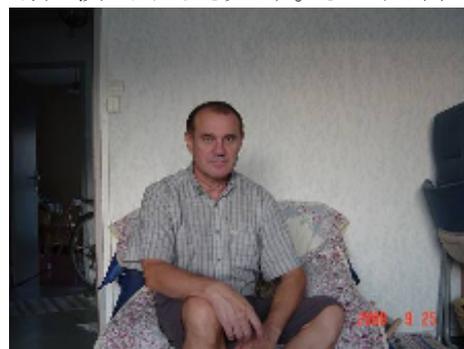


翌22日は2人とも仕事に出かけ、私はマルセイユの街を、地図を持って、P氏に教わったコースをたどりながら街を歩きました。美しい街で、あちこちの街角で腰を下ろし、風景や街ゆく人々を眺めて1日を過ごしました。

23, 24日;アヴィニョン、G. P 宅

マルセイユからアヴィニョンまでは2時間しかかからず、10時過ぎに着きました。G氏とは3時に会う約束をしていましたので、荷物を駅の手荷物預かり所に預け、街を見て回ることにしました。アヴィニョンの街は城壁に囲まれた街でした。7月は演劇祭が行われることで有名で、INと呼ばれる100か所の劇場と、OFFと呼ばれる110か所の屋外で30日間連続で、世界中から集まった劇団によって劇が演じられるそうです。その時は街中が人であふれ、東京の地下鉄のようになると言われている。今はシーズンオフなのに観光客で溢れていました。街中のどの通りのカフェテリアの椅子も満席でした。

道行く人たちの声に耳を澄ますと、フランス語が半数以上ですが、後は英語、ドイツ語、イタリア語、スペイン語などです。日本からインターネットでホストを探すとき、よく「旅行に行くから」と言って断られたり、返事がないので断られたと思っていると、後から、「旅行に行っていた」と返事があったりしていましたが、ほんとうにフランスは旅行ばやりです。マルセイユのP氏たちもイタリア旅行から帰ってきたばかりでした。



3時に駅でGennadyと会い、彼の車で自宅に向かいました。彼は運転しながら道順を説明します。私が一人でバスで移動できるようにです。彼のアパートは城壁の外にありました。駅からバスだと30分の距離です。

彼は独り者でした。しばらくすると私の他にサーバスがやってきました。フランス人で、F. M と書いてくれました。国内旅行でもサーバスはお互い気安く泊め合うことがわかりました。観光客が多く、ホテルを見つけるのは困難な所為もあるようです。どこから来たのか尋ねて驚きました。コリオからと言います。そこは3日前に、研究会に東京から参加した人たちと泊まったスペインの国境に近い海岸のリゾート地です。私たちの泊まったホテルの前の道路をいつもジョギングしているというではありませんか。彼は週に1回の割合でサーバスを泊めていると言います。場所がよいので人気があるのだそうです。フランス人と外国人が半々だが、日本人は泊めたことがないので、来るように宣伝してくれと言われました。

G 氏 は夕方7時に出かけ朝の7時に帰ってきます。ホテルの夜の警備員をしています。週3日の勤務で2か所に行っています。25年前にウクライナから逃れてきたが、ウクライナで習得した工学部卒の肩書はフランスでは通用せず、警備員をして生活の糧を得ているのです。奥さんを貰う余裕もないようです。サーバスに入っても外国旅行などできるはずはないのです。「何のためにサーバスに入ったのですか？」と尋ねると、「他人を受け入れることで人と会える。それは自分を高めることになる。あなたは日本の文化を運んできた」との答えでした。彼は自分の寝室の他に2部屋持っています。

G 氏が「5時の夕食でよかったら作る」と言いますので作ってもらい、3人で食べました。少しベーコンが入ったカリフラワーを刻んだスープでした。「これにはカロリーはない」と思いながら食べました。パンはスライスしたのも硬く、食べるのに時間がかかります。お茶はどんぶりのように大きい器で飲みます。それらを食べ終わると3種類のチーズが出ました。ナイフで切り取って食べます。最後に小さなリンゴとブドウが出ました。どうして最初から出しておかないのでしょうか。この食べ方は他のサーバスでも同じでした。

夜、F 氏にはカムチャッカ生まれという女性が車で訪ねてきました。2人は外国籍フランス人の地位向上のために戦う活動家で、その打ち合わせのためにF氏は来ていたのでした。翌日はパリでの会議に出席するために早朝出て行きました。

24日は、電車で1駅のアルルに行って1日を過ごしました。オペラの「アルルの女」を思い出して行ってみる気になったのです。G 氏は部屋のカギと住所と玄関のドアを開ける暗証番号とバスの番号とバス停の名前を書いたカードを持たせました。

アルルも観光客でいっぱいでした。昼食のためカフェテリアの椅子に座ろうと思ってもできません。1つ空いていても、1つのテーブルには3人の見知らぬ白人が座っています。仕方なく、テイクアウトのサンドウィッチを買って、必ず釣銭を誤魔化します。40年前に来た時と変わっていません。その時は電卓を示しながら大声でケンカをしたものですが、今回は黙って我慢しました。2, 3百円のことで、英語とフランス語で言い争っても精神衛生上良くないだけです。

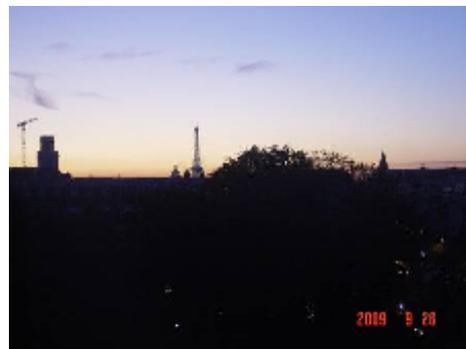
アルルまでの運賃ですが、行きが50ユーロで帰りが、65ユーロでした。行きの電車の車体は古く、帰りは新しい車体でした。1ユーロは140円です。1ユーロ100円から出発したのに、140円になった原因がよく解りません。何もかも高いです。自動販売機のコーラ1缶が15ユーロですから210円にあたります。

25, 26日;パリ, S.B 宅

サンジェルマン通りのど真ん中にありました。ソルボンヌ大学の近くです。7階(日本式に数えたら8階)の最上階にありました。前日、G 氏に電話をしてもらい道順を聞いていたので、道を尋ねながら行きました。隣はピザ屋でしたが、そのピザ屋で番地を尋ねても知りませんでした。探し当てるのに苦労しました。

日本でサーバスリストを調べたときは C という奥さんの名前がありましたが、奥さんはいませんでした。

「君が8時にここにいたら一緒に食事をしよう」と言いますので、そうすることにし、私は荷物を置くとすぐにパリの街に飛び出しました。ノートルダム聖堂は40年前と変わりはありませんでしたが、ここも観光客でごった返していました。



帰ってみると、もう1人、ブラジルからの女性のサーバスがいました。昨日から来ているのだそうです。彼が料理をし、3人で食べました。少し悪い片足を引きずりながらの料理です。その女性は「日本に行ったことはないが日本は精神的に優れた国です」と言います。「どんなふう？」と尋ねますと「私は生長の家の信者です。素晴らしい教祖を生んだ国です」と。私は彼女と話をする気力を無くしました。翌早朝、彼女は空港に向かいました。

26日は朝から歩き始めました。サンジェルマン・ド・プレという教会の傍を通る時、教会の中から音楽が聞こえてきました。中に入ってみると葬儀が行われていました。音楽はテープで流される葬送曲らしいのですが、私はこれほど美しい曲をこれまで聞いたことはないような気がしました。ギターを弾きながら女性が歌っているのです。私は教会を出るとき入口に立っている乞食の老婆に2ユーロのコインを渡しました。美しい音楽の代償のつもりでした。

昼ごろから疲労を感じ始めたので、歩くのを打ち切り、帰って休むことにしました。10日間の疲労が蓄積したようです。歩数計を身につけていましたが、毎日1万数千歩を刻んでいました。それに食事のまずさも影響していると思いました。

彼はその日朝から出かけていました。水道関係の技術者だった退職者のはずです。どこに出かけるのかは尋ねませんでしたし彼も言いませんでした。昼食は言われた通り勝手に冷蔵庫を開けて食べましたが、おいしいものは何もありませんでした。こんなまずいものばかり食べていたのでは彼も長生きできないのではないかと思います。

夕食のとき、奥さんのことを尋ねると、答えてくれました。奥さんは3か月前に亡くなられたのです。癌で苦しんだが、強い女性だったのに最後は「She yielded herself」と言いました。自殺したのです。子供さんのことを尋ねると、娘はベルギーで家庭を持っている、息子はリヨンに住んでいるとのことでした。

「ここは場所がよいので、日本に帰ったら紹介したい。してもよいですか？」と尋ねると、大いにしてくれとの返事でした。日本から女性たちが押し掛け、スーパーで買い出しをして、日本料理を食べさせたら、彼の料理も変わるかもしれないと思ったからでした。居間が広いので5、6人は雑魚寝ができます。

27, 28日; B-D. S 宅

サンジェルマンから市電で40分南に下ったところにある Orsay という町に住んでいる黒人男性と白人女性の夫婦です。駅にB氏が迎えに来ていました。彼は会計士です。立派な1戸建ての住居でした。2人は2003年春に関西を旅行し、その時のアルバムを興奮気味に説明しました。ちょうど桜の季節で、感動の連続だったようです。

翌朝、彼は太極拳を習っているのと一緒に来ないかと言います。私も付いて行きました。彼はまだ初級で、フランス人の女性が師範でした。彼女の動きは完成されていると感じました。私は教師のとき空手の指導をしていましたのでそれが判ります。生徒は20人ほどでした。中国人の生徒もいます。師範の女性は私の立ち方を見て「空手の有段者でしょう」と言いました。1時間余り練習をしたために疲れがぶり返しました。家に帰ると、2人に私の身体状況を説明し、ベッドで眠ることにしました。

DさんがB氏を呼ぶ声ときどき聞こえますが、口調には情愛がこもっています。「ブーバカー」と尻上がりに呼びます。夕食が終るとDさんが話し始めました。「私は小さいころパリの北にある街に住んでいたのですが、ドイツ軍の爆撃に曝されていました。そのころ日本ではどうだったのですか？ あなたの年から考えると戦争を経験したと思うのですが」「私の街も空襲を受けました。日本は木造建築でしょう。火の海になりました。長崎には原爆も投下されました」「爆撃で建物は壊れるのです。防空壕はあったのですが、かえって生き埋めになるので入りませんでした。外に出ると戦闘機が降りてきてダッダッダと撃つのです。一度、フランス軍が戦闘機を撃ち落としたことがあります。ドイツの兵士がパラシュートで降りてきましたが、私の家にそばでした。怪我をしていて動けず、「ママー、ママー」と泣いているのです。それを男たちがレンガを投げつけて殺してしまいました。忘れられません。どうして人間は戦争なんかするのでしょうか？ 私は怖かった記憶はありません。小さすぎたのでしょうかね。でも2歳上の姉はいつも怖がって母を困らせていました。戦争が終わっても怖がり続け、母を悲しませていました。父は兵士でしたけど、幸い戦死せずに帰ってきました。ねえ、Fさん、どうして人間は戦争をするのですか？ 知



っています？」

翌朝はたいぶ体力が回復していました。国鉄の直行電車に乗り、ドゴール空港に向かいました。

○イギリス短期留学 & UKを旅する 2009.05.08 ~ 06.25

福岡県 T. R



GW明けの5/8にイギリスへ旅立った。ロンドンから車で1hのコルチェスターでホームステイをしながら4週間語学学校へ通いその後3週間スコットランド・ウェールズ・イギリスを旅する。

5/8~10 ヒースロー空港からカンタベリーへ移動。夜到着しパブでボリューム満点のプラウマンズ(農夫のランチ)を注文。翌朝歩いた後2年振りにイングリッシュブレックファストを味わう。トマス・ベケットが暗殺されたカンタベリー大聖堂などを観てバスで小さな村チラムへ向かう。瀟洒なマナーハウスの前に広場があり家々が取り囲む荘園だ。田舎道をバスに揺られ小さな村を訪ねるのが近頃何より楽しい。ゴーストツアーでは山高帽にマント姿のガイの強い訛りと早すぎる英語にあまり聞き取れ

ない。小舟が行き交い、花が咲き匂う川沿いを散歩したり極端に傾けて建てられた楽しい家を見つけたりカンタベリー物語博物館にも足を運ぶ。10日午後、車でコルチェスターへ向かう。ホームステイ先のご夫婦が駅で迎えてくれた。

5/11 ~ 6/5 本日より4週間の語学学校の授業が始まる。若い人に交じり久しぶりの学生生活を満喫した。学校主催のバーベキュー、サイクリング、ボウリングに参加し週末は村々を訪ねロンドンでシェークスピア劇を観て大好きなフェルメールの絵を見に美術館巡りもした。バンクホリデーには学校提供のケンジントン行き無料コーチツアーにも参加した。運よくホストマザーは料理名人だった。イギリスでは新型インフルエンザを誰も気にも留めずマスクは細菌を培養するだけの代物だと日本人との感覚の差は大きい。

6/6 いよいよ三週間のひとり旅が始まる。コルチェスターを立ち去り昼過ぎヨークに到着。午後ヨークミンスター、クリフォードタワー、ジャンブルズ、(古い家並み)ヴァイキングセンターなどを廻り本屋に立ち寄り小説を購入する。寒かったが旧市街を取り囲む城壁をゆっくり歩いた。ウェールズのスノードン登山列車の予約をする。

6/7 エジンバラに正午到着。汗ばむ陽気でまずエジンバラ城を目指し、坂を登る。黒々と聳え立つ巨大な城砦に圧倒される。国立スコットランド美術館でこの国に一点だけのフェルメールの作品と再会、実は今年初め東京で観ていた。スコット記念塔から絶景を楽しみ夕方汽車でスターリングに移動。駅でジャイルスが待っていてくれた。小さな村の蔦の絡まる家に住んでいて田舎好きの身には嬉しい。奥さんのジューンと見分けのつかない程そっくりの兄弟猫がいる。常に一匹だったがさっちだったのだろうか？ジャイルスは土木技師でジューンは環境門家をリタイアしたとか。黄昏のドライブ後、暖炉の弾ける薪の音を聞きながらの語らいは楽しいものとなる。

6/8 ジャイルスが焼く美味しいライ麦パンを朝食にいただく。交通の便が悪い為出勤の車に同乗し車でエジンバラに何と8:23に着く。目抜き通りのロイヤルマイルを下り小高い丘ホルロードパークに登る。海も見え素晴らしい景観である。朝空気は冷たく心地よい。女王が滞在されるホルロード宮殿、エジンバラ博物館、ピープルスストーリー博物館、St.ジャイルス大聖堂を観て流石に足が疲れ観光バスに乗り足を労わる。ランチにブルーチーズと蒸した新鮮なムール貝を満喫する。500gか1kgか迷った挙句に1kgを注文、頑張って食べる羽目になったが満足！ジューンの好意で夕食に兔肉が出たが匂いが強く硬くて口に合わず昼間の幸せな後味が台無しになった。

6/9 午前中ジューンと庭でのんびりする。小川のある裏庭はかなりの傾斜で長く伸びており変化に富む。スターリングを立ち去り車で海沿いを北上し15:00頃アバディーン着。心なしか寂しい感じの海辺の街だ。小雨の中2h程市内観光後夕刻郊外に住むポールとエレアのお宅へ。ポールは会計検査官、エレアは小学校教師だ。ポールの手料理を楽しんで黄昏のドライブに出る。この頃からフラッシュをたくと新品のカメラから白煙が出るようになる。写真



が駄目になるのが不安で極力フラッシュをたかめようとした。帰国後、新品と交換してくれて一安心。

6/10 エリアは朝風邪で声が出ない。午後雨のエンジンバラに戻りスコットランド博物館を観た後カフェ・プロデイズクロスでクリームティーで暖まる。両手で抱える程大きな絶品のスコーンだった。ここはその昔皆に慕われた神父が住む家があったが次第に人殺しを重ねるようになったとか。有名な「ジギルとハイド」の話は正にここで生まれたという。夕方、ディアドラと合流。アーティストでケルト語も教えるアイルランド人女性だ。夜また仕事に出掛けたので自分で野菜尽くしの夕食を作る。それは胃に優しい一皿となった。

6/11 作家/詩人博物館、豪商の家などを廻り楽しみだったスコットランド名物ハギスを食べにパブに入る。羊の内臓を刻んでスパイシーに味付してありなかなか美味しい。マッシュポテトと茹でたオレンジ色の蕪がたっぷり添えてある。ウイスキーを垂らして食べるともっと美味しいと後で知り残念なことをした。実はエンジンバラで一番楽しみにしていたのが地下都市探検ツアーだ。疫病が流行った時代の古い家々を切り取りその上に新しい街(今の旧市街)を再建した。スコットランド人は知らない人が多く諦めかけた。もしやとインフォメーションで聞くと何と 20 分おきに開催しているという。当時の衣装を纏ったガイドの芝居がかった案内に胸が躍り真暗闇の地下都市探検は予想以上に楽しかった。ディアドラも夕食にハギスを出してくれ二度楽しんだ。

6/12 早朝エンジンバラを発ち南下しウェールズに入る。三度乗り換え 15:30 雨のカーヴオンに到着。カーヴオン城は海辺に建ち難攻不落の城として名高くチャールズ皇太子の叙任式が執り行われた美しい城である。数百年も営業しているという人気のパブ&インに 2 泊する予定だ。

6/13 予約していたスノードン国立公園の登山列車にれないよう朝食もとらずバスに乗る。スランペリスから 9:00 の一番列車に乗り込みスノードン山頂を目指す。麓は快晴だ

山頂は霧で何も見えない。絶景を楽しめる確率はたった 30% だそうだ。麓に戻って今度はスランペリス湖畔鉄道に乗り湖越しに景色を楽しんだ。機関車はトーマスそっくりで愛らしい。カーヴオンに戻ると城の前の広場はマーケットで賑わっていた。疲れて夕方迄仮眠する。夜、ライトアップされた城を見ようとパブで粘って待ったがいつまでも暗くならず宿に戻った。

6/14 朝、バスで 1h のコンウィに移動。川縁に建つコンウィ城の城壁の下を汽車が通る可愛い小さな町だ。チロースのフライドポテトを片手に川縁でランチと洒落たがあまりの量に食べきれない。ここには UK で一番小さな真っ赤な家があり間口 1.8m 奥行き 2.5m の二階建てに夫婦者や大男が住んでいたとか。赤いマントとフルルの帽子のおばさんに £1 を渡すと入れてくれる。今夜は城の傍の B&B に泊まる。

6/15 早朝散歩し 10 種類程のフルーツを盛ったシリアルをいただく。その美味しさは今も忘れられず実は来年もう一度食べに行こうと考えている。9:00 に友人のデビッドが迎えに来てそのままトレッキングに連れて行ってくれた。行きは蒸気機関車に乗り帰り道を歩くコースだ。彼は退職後趣味でトレッキングの主催や案内をしている。山あいを縫って歩く 4h 近いトレッキングは楽ではなかったが青空の下で頬張るサントイッチは最高だった。そこ此処にトリカブトの花が咲き乱れていた。羊たちにはニュージーランドと違い長い尻尾がある。自然観察園やドライブの後彼らの別荘に向かう。奥さんのエドウィナと二匹の大きな犬が迎えてくれた。

6/16 朝、デビッドが部屋にミルクティーを運んでくれて感激。

勿論奥様にも！ イギリスの旦那様は皆台所仕事をよく手伝う、しかもごく自然に。犬たちを連れて近くの海岸に出掛けた後彼が美味しいランチを作ってくれた。午後、エドウィナが近くの町や村に案内してくれ伝統的な木底のダンス靴「クログ」の専門店は特に珍しかった。夜レストランで食べたアイルッシュ・ステーキにも大満足だった。

6/17 朝から雨が本降りだ。大好きなポーリッジに生クリームとブラウンシュガーをかけていただく。エドウィナと再会を約束し次は友達を連れておいでとお誘いを受けた。デビッドが駅まで送ってくれる途中(クルーまで 3h)思いがけない所に立ち寄ってくれた。それはナローボートのベースだった。嬉しくて思わず叫んでしまった次第。クルーの彼らの家に立ち寄って汽車に飛び乗る。三回乗り換え夕方コッツウォルズのレイコックに着く。茅葺の B%B のオーナー、ナンシーが迎えに来てくれた。二年前に泊まって以来友人である。



遅
発
が山



6/18 ナンシーの孫たちがやってきて花いっぱい庭のツリーハウスで遊んでいる。チップナム経由でバスでカッスルクームへ向かう。バスは日に4本しかない。キャッスルインでミルクティーを頼むとしっかりと最高に美味しいスコーンが出てきた。一軒だけある土産屋の女主人と話し込む。日本からしかも女性が多く訪ねる村だ。「どうして女性ばかり？」と聞くので「ご主人たちは奥様の為に仕事に励んでいるのよ！」と言うと大笑い。レイロックに戻りカメラのレンズを発明したタルボットの館へ。夜、パブでナンシー夫妻と一緒にご主人に夕食を御馳走になる。

6/19 ナンシーは野菜作りや果物の栽培も玄人はだして丸々とした鶏も8羽飼っていた。残念な事にその数日後5羽が狐に殺されてしまった。昼前、ナンシーがマームズヘリーの美しい庭園に案内するという。オーナー夫妻がヌーディストで有名な庭でイングリッシュガーデンの本で見た記憶がある。しかもそれぞれと写真を撮る機会に恵まれた。度々訪れるナンシーは同じ日にふたり揃って見たことが無いという。「玲子の運よ！」と大感激。午後、車でバスへ移りダイアンとフィルの待つ家に向かう。夕方、彼らの畑に行き運河沿いを散歩した。2年振りの再会で今回は5泊させていただく。夜、滞在中のスケジュールを話し合う。フィルは大学のコンピューター技師、ダイアンは大学の司書をリタイアしたばかりだ。

6/20 朝一緒にマーケットに出掛けカフェで友人のジェーンとお茶を飲む。明日メンバーを集めてパーティーをするという。午後ひとりでパースを歩く。パース・アビーの塔に登り、「プライトと偏見」のジェーン・オースティン館、美しいワレット、高級住宅街のサークルなどを観て廻る。歩き疲れてお米を買い家に戻る。夜、ダイアンと映画「Last Chance of Hervey」(ダスティン・ Hoffman、エマ・トンプソン主演)を観にいく。観客は少しお洒落をした夫婦が多く笑いがこぼれ日本と違ってまるで70年代のような懐かしい雰囲気だった。夜、フィルが作ったオリエンタル・カレーをいただく。



6/21 3人で自動車に乗りフレッシュフォードから半日トレッキングを楽しんだ。いくつかの村や牧草地を抜け運河沿いのトープス(昔馬が曳いた)をボートのベースのあるブラッドフォード・オン・エイボンまで歩いた。歩くのもボートも好きなわたくしを喜ばせたいという心遣いからだ。夜、パーティー用にちらし寿司を作った。5人それぞれの名前に合う漢字を探し意味も添えたネームカードをととても喜んでくれた。ストーリーテラーを始めた個性的な女性もいた。

6/22 車でカーティフに行きバスに乗り換え山あいにあるカッスル・コッポ城に出掛けた。まるでおとぎ話の中の絵のようなお城で忘れ難い。カーティフ城に寄って帰ったが何だか今日は
ひどく疲れた。

6/23 ダイアンがブリストルを1日案内するという。随分歩いて美しいサスペンション・ブリッジ(吊り橋)へ。職場が近いフィルと合流してランチの後、ブリストル大学、美術館、カテドラル、市庁舎などを廻る。ベイサイドの船のカフェでお茶を飲みフェリーで遊覧してパースへ。二人でパブに寄りビールで喉を潤す。最後の晩なのでカレーライスを作り庭でワインを開けた。夜、荷造りをする。ここでも友人を連れて来ていいよと言われる。



6/24 朝食にカレーをいただきおにぎりを詰めてふたりに別れをする。長居をさせていただき感謝の思いでいっぱいである。長かった
7週間のUK滞在も終わり機上の人となった。いろいろな人との出会いがあり発見があり旅の楽しさを益々感じた充実した日々だった。

5. 会費納入のお願い

今年度の会費の振り込みをまだされていない方は、下記の口座へ振込をお願い致します。

郵便振替先

口座番号 記号: 01950-6; 番号: 36441

加入者名住所: サーバス九州事務局

郵便番号 889-2153

宮崎市学園木花台南 1-2-9

6.トラベラー受け入れ及びサーバス旅行レポート等のお願い

トラベラー受け入れ又はサーバス旅行をされた方からの体験談・報告を下記の事務局へお寄せ下さい。会員間の情報交換になりますので、手紙又は電子メールなど短くても、また、写真添付もよいですのでお願い致します。